

小田原市文化振興審議会 第5回会議概要

1日 時 令和4年2月3日(木) 14:00~15:30

2場 所 生涯学習センターけやき 2階 大会議室

3出席者

(1) 委員

杉本委員、吉田委員、大石委員、関口委員、木村委員、萩原委員、鈴木委員、池田委員

(2) 行政

鈴木文化部長、尾沢文化部副部長、諏訪部文化政策課長、黄金井文化政策係長、
穂坂主査、原主事

4傍聴者 0人

5会議の概要

(1) 議題 (1) 小田原ならではの文化によるまちづくり基本計画(案)について

事務局より説明

- ・令和3年12月1日、会長・副会長より市長へ答申
- ・令和4年1月27日、厚生文教常任委員会で基本計画について報告
- ・文言の修正等について

会長

今年最初の会議でもあるので、感想や意見等、お一人ずつご発言いただきたい。

A委員

評価の内容は、基本計画に沿うものだと思う。

三の丸ホールには、もう何度も足を運んでおり、オペラの公演等、素晴らしいものが小田原で見られるという事に感激している。小ホールはコンパクトだが臨場感があり、大ホールとは違うリアルさがある、さすがだなと思っている。

B委員

計画策定後、これから施策を進めていく段階になると、その運用が大事になると考えている。今度はこの計画に基づく実行をしていく必要がある。

C委員

地域に根ざした文化振興が大事だと思う。自分は文化連盟の会長でもあり、文化連盟の目的は文化振興の力になることであつたが、今後市民文化祭が開催されないということで、そ

の目的が断ち切られてしまったと感じている。53年目を迎える文化連盟という組織が、これからどうしていくのか、検討をしなくてはならない。

会長

市民文化祭とは、どういったことを行っていたのか。

文化政策係長

市民文化祭は小田原市が主催し、文化団体に活動の成果を披露する場所を提供し、市民の皆様に見てもらおうという事業である。例年9月から12月に、市民会館を中心に実施してきた。文化連盟に属する団体が中心となって参加し、ジャンルは公演、展示、囲碁や俳句など多岐にわたり、小田原の幅広い文化団体が参加していた。

会長

市民文化祭が中止になった理由は何か。

文化政策係長

市民会館が閉館し、小田原三の丸ホールが完成するというタイミングが、改めて事業を見直す契機となった。市民団体の発表の場として、市民文化祭は貴重な事業であったが、一方で多くの一般市民にとっては、市の主催事業として会場を先行予約してしまうため、9月から12月の間会場を借りることができない時期となってしまうという声もあった。市民文化祭参加団体以外の団体の方からは、発表の機会がなくなってしまうという声もあった。

小田原三の丸ホールは、より幅広い団体の方に使用して欲しいという趣旨もあり、市の主催での先行予約なく、皆さん一斉に予約をしていただく。こういった点からも見直しを行い、廃止するという結論に至った。

会長

より幅広く文化活動を行っていただくための見直しとのこと。文化連盟の今後は、その目的である文化振興の力となるために組織で議論していただきたい。

ただ、市民の文化の発表の場というのは、非常に重要であると思っている。

D委員

人と豊かな歴史、自然。この3つが、小田原の文化を豊かにしている大きな要素であると思う。これをどう活用、人であれば活躍していけばいいのか、行政側が市民にビジョンを提案しているという点で、この計画はいいものだと思う。

小田原は、人口の割に芸術文化を嗜む方、技術・知識・能力を持った方がたくさんいる。彼らがどう生きていくのか、また生き残っていくのが重要。歴史的建造物や三の丸ホール

のような施設も、文化の豊かさを支えていくインフラである。豊かな小田原のモノをどう残し、発展させていくかが重要で、それを示すものとして、いい計画ができたと考えている。

E委員

D委員と同じ思いである。

2月2日まで三の丸ホールで行われていた「コネクションズーさまざまな交差展一」という現代アートの展示会では、創作中アーティスト、コーディネーター、キュレーターが話をまとめる中で、土地の特殊性、歴史と人に焦点を当てた事が、うまく形になっていた。写真家浅田政志氏の写真には、歴史と文化の担い手が一人一人、笑顔で映っている。新たにこのまちに来た人にもスポットライトが当たっている。産業の担い手や伝統的な商家の御一家も映っていて、担い手が生き生きとこのまちで活動ができる状態でないと、文化振興は進まないと感じた。市民文化祭の話にもあったが、長い歴史の中で積み上げられたものとそれを担ってきた方々、そして潜在的にまちの中に眠る人的資源との、緩やかな交代ができないと文化振興は進まない。

行政に期待したいのは、表に出ていない力を引き出すしかけを作る事。意欲を持った若い人も、他のまちの人を小田原に呼び込みたい、まちの魅力を伝えたいという思いでいる。この計画を大事にし、指針をもとに行動していきたい。

F委員

文化によるまちづくりという事なので、単なる文化振興ではなく、まちづくりにつながっていかなくてはならない。

まちづくりという観点からすれば、市の政策との整合性が大切である。2030ロードマップが示され、これから総合計画もできる。この計画が、これらと整合して進んでいくのが大事である。例えば食について、基本目標4には記載がないが、市では、美食のまちを作るという取り組みも打出しているので、この計画に反映されてもいいのではと思う。計画策定のタイミングが違うので、難しいこともあると思うが、市の総合的な政策だと思うので、これからの整合性をしっかりとってもらいたい。

コロナを経て、多くの人が文化の価値や意味について考える機会を与えられ、文化は大切だという事を多くの人が再認識できた。コロナ前と比べ、文化は、趣味や余裕がある人だけのものではなく、社会にとって必要なものだと感じた人が多かった。この計画を市民の皆さんに伝えていくには、いいタイミングだと思う。広報に大いに注力されたい。

また、文化活動には資金が必要である。経済と切り離して文化振興は行えない。その観点も含めて、取り組んでいていただきたい。

G委員

小田原ならではの計画ができたと思う。第1章では、多様性があって歴史も深く、市民の

思い入れがある文化が 9 つに特徴化され、市民の皆さん一人一人が、自分が関わっているものが入っていると感じられると思う。直接記載がなくても、ここに含められている。

また、図式化された基本目標は、各基本目標が繋がりをもち、未来のまちを作っていくのだという事が伝わる。第 4 章の各基本施策には関係分野も示してある。文化は、それだけが取り出されるものではなく、日々の暮らしに根付き発展してきた。これからも生活に根ざして薫り高い文化を作り、未来のまちにつながっていくと、分かりやすく流れに沿って読むことができる。評価については、成果が上がっているという評価ができればとてもいい。

今も十分、小田原の文化は素晴らしい。この計画を通じて、市民の皆さんが自分たちのまちを認めていただければいいと思う。

会長

事務局で直せるところは修正して計画に反映してもらいたい。

これからの文化は、日常の中に眠っているものを取り上げることが大事だと思う。今までの文化は、特別なものだった。お茶などは、もともとは日常にあったものが、取り上げられ特別なものとなった。生活の中の文化を取り上げることで、最終的に小田原の価値が上がると思う。世界的に見ても、文化的な生活ができる都市が選ばれ、人を集めている。新しい時代にバージョンアップしていくのが大事である。

また、計画や小田原ならではの 9 つの文化の特徴を、シンポジウムや展覧会などで市民の皆さんに見て、知ってもらう必要がある。商業や農業といった仕事そのものも文化であり、皆に関係がある。小田原全体が、文化で一つになっていけたらいいと思う。その機会を作っていただければと思うので、是非ご検討いただきたい。

(2) 議題 (2) 文化振興に関する提案について

資料に沿って、会長より説明

会長

計画に沿って、まちなかで活動している人や若い人たちを取り上げ、評価していかないと、文化によるまちづくりの実現は難しい。市民ホールで行う催事だけが文化ではなく、地域の文化をも取り上げる制度が必要だと考える。このため、市民文化活動を発表する機会と表彰する仕組みを作ってはどうか、という提案をしたい。文化団体の活動を含め、小さなグループや障がい者の芸術活動など、幅広く取り上げていきたい。

例えば、活動計画書として、こんな活動を行っているというものを作ってもらい、集め、その中から活動を発表する機会を作り、発表し、審査し、毎年表彰する。市民の多様性を発見するため発表の場を作り、活動内容や貢献している人に対して表彰するしくみを作ることが出来たら、新しい人の活動等も取り上げることができるのではないかと。

資料の 2 枚目には表彰の仕組みを記載した。自薦・他薦の応募もあっていいし、文化の日に発表してもらい表彰するのもいいと思う。

応募により、市民活動のデータベースができる。活動を把握する事は、まちなかにある文化の把握につながる。

表彰対象は年代で分けてもいい。表彰内容は、今後検討していくことになる。分野は資料にかかっているだけではなく、なりわいや商業・産業的なものも入ってくるとよりいい。

他の地域では、募集して表彰した団体に補助金を付け、より活動が活発になり毎年評価が上がったり、停滞すると予算が削られる、といったしくみもある。様々な団体がチャンスを得られるということでもある。補助金については、この後事務局から例を挙げてもらう。

審査は、審議会全員でやるのもいいが、代表者と専門分野の人に入ってもらい、構成してはどうかと考えている。

文化政策課長

補助金については、表彰制度に結び付けるのも一つの家だと思う。

堺市では文化芸術活動応援補助金という制度がある。例えば、一般補助のスタートアップ支援では、活動をスタートしたいが、資金力のない小さい団体をサポートするもので、こういった補助金があると、スタートしやすくなる。また、特別補助として社会包摂型の事業を行うと補助金が出るという制度もある。

仙台では市ではなく、市民文化事業団が活動助成を行っている例がある。市が補助金を出すものではないが、市で行うとするならば、計画の理念に沿った活動について、助成金を出すという検討ができるかどうか、というところである。

会長

湯河原町では、宮大工さんのツアーを行う企画に文化庁の補助金がついた。海外の富裕層は有名な文化財等に飽きてきている部分もあり、ものを作る職人に目が向いている。文化財登録されている旅館での宿泊体験や建物の説明などのツアーを組み立てた。湯河原をモデルに、全国の文化財を上手く活用して海外の人達を取り込む。文化庁としても、大勢来てもらう文化・観光もいいが、コロナ禍においてターゲットを決め、案内する等クオリティの高いものを作っていくという方向を模索しているようだ。こういった補助金を、事務局で研究していただけたらと思う。

それでは、今回の提案について、皆さんからご意見をいただきたい。

A委員

提案には大賛成である。活動する際にお金がないと立ち止まってしまう。自分の団体も毎年助成金を応募し、10件申請してとれる助成金は2件程度。そのくらい、補助金等を取るのには難しい。それでも、市民に障がい者の活動を伝え、見てもらい、思いを伝えるために必要なものである。どこかの団体にまとまった補助金を出すのではなく、手を挙げたところに審査をして補助金を出すというのは、公平性もあっていいのではないか。

E委員

三の丸ホール建設時、計画の中で、魅力を感じたのは小ホールだった。様々な展開ができる小ホールを使い、新たな担い手、潜在的な担い手が表舞台に出てくるきっかけができればいいと思った。若い人にチャンスを作り、また、ベテランが応援するかたちで交流を図ることも含めて、補助金等コンペ式の制度ができればいいのではないか。若い人は何か始めようと思っても、その場を作ることも、イベントの資金を集めることも大変である。だが、いいものを持った人は小田原の中にもいる。そういう人にチャンスを与えて、次の文化活動の担い手を育てるため、行政に仕組みを作っていたいただければ、計画にある振興策が生きてくる。

D委員

日常の中で、自分の食卓に欠かせないのは十郎梅とかまぼこ。また、休みの日は御幸の浜やお城を散歩している。更に職場は三の丸ホールで、市民の方々の演劇・舞台・芝居・写真・美術などを見せてもらっている。食を含めた豊かさと芸術文化と自然を楽しんで生活しているが、それは小田原で暮らしているからである。しかし、小田原に暮らしながら、こういった豊かなものを味わえない人もいる。そういった方々が、小田原で暮らしていることの文化の豊かさを実感していかなくてはならないと思う。小田原以外の場所にPRし来てもらうことも重要だが、それは一方的なアプローチ。小田原で暮らしている人がいいと思わないと、魅力は伝わっていかない。

小田原で活動している人々を表彰するしくみを作るのであれば、活動が続けられるよう経済的支援・表彰も必要だと思うが、市としては、活動の支援のみではなく、知らない人に知ってもらう事も、表彰の対象となる活動だと考える。そういったことを含めて評価することを検討して欲しい。

会長

自分も木の建築賞の選考委員をやっているが、作品のデザインだけではなく、森を育ててその木を使うといった活動に対しても表彰を行っている。デザインだけがいい建築ではなく、木の使い方やかかわり方を含めて表彰している。活動も一つの評価としてみることも非常に大事だと思う。

B委員

自分は地域住民の代表であり、年1回、行政と一緒に地域力市民力表彰を行っている。賞をもらえると励みになるが、長くやっていると、表彰対象の団体がなくなってくる。市だけではなく他でも表彰を受けるので、今後、表彰対象を確定することが大変になる。表彰自体はいいことだと思う。よく考えながらやっていくべき。

会長

木の建築賞では、審査会を公開で行っている。発表の場で質問したりコミュニケーションをし、議論するなど、審査の際のやり取りが大事だと思う。公開しているとそれが広く市民にも知られる。閉鎖的に審査会をしても意味がないので、ある程度オープンにして行うことが大事だと思う。

F委員

表彰制度で何を表彰するか、作品ではなく活動を表彰するのがいいと考える。活動をいかに評価するかが大切だと思う。補助金が出るなら応募もしやすくなるし、公開プレゼンであれば、活動している人たちがお互いの活動を知ることができるのでいいと思う。

ただ、補助金や税金にも限度がある。今、資金調達の仕方はクラウドファンディングなど様々ある。行政が資金以外の面でサポートするというのもいいのではないか。経済的な余裕がなく、文化活動に関われない方もいると思うので、そういう方に対してどういう支援をするのが大事である。

世の中にマネーストックはあるはずなので、こういったまじめな活動に資金として引き出す方法を、例えばお金を出した人に感謝状を出すなどの工夫を、民間もだが、行政も考えていく必要がある。

会長

ふるさと納税も使える。

資金力のある企業などは料亭などを購入している。海外ではお城を購入した例もある。社会貢献という事であれば、資金を引き出すことも可能ではないか。

G委員

どこのまちでもある補助金制度ではなく、小田原ならではの計画に沿った制度になるといいと思う。芸術活動だけでなく、「小田原ならではの文化によるまちづくり基本計画(案)」にある9つのカテゴリーに即して表彰するなど。例えばなりわい文化としておいしいお豆腐を作り、その技術を受け継いでいます、などでも手を挙げてもらえるように。

基本目標の中で文化を守り伝える指数はどのくらいか等、基本目標を表彰の際の指標にするなど、計画に則して審査するそんな表彰ができれば。いつもやっていること、生活自体が文化だと、やってきてよかったと思えるような表彰になるといい。

会長

やはり、基本計画に沿っていくことが大事だと思う。

C委員

地域貢献すること、人が人に尽くそうと思うこと、人をほめたたえることは当たり前で良識的なこと。ただ、表彰することで、人はさらに励むと思う。

今日の委員会では、自分の決意をどのように持つか、参考にさせていただいた。文化連盟の解散の話もあるが、私は反対を主張しようと思う。

E委員

作品の表彰も、「小田原ならでは」に結び付いていればいいと思う。

会長

具体的にどう展開していくか、事務局にまとめていただく。

(3) その他

会長

9月5日にオープンした三の丸ホールの状況を、市民の評価等をお話しいただきたい。

市民ホール担当課長

オープン時は、緊急事態宣言中だったが、予定通りオープニングイベントも行った。オープン後は、1度無料で利用できる市民優待企画事業を行い、既に32団体が利用している。市民優待企画事業としては、全部で90団体が使用予定である。1月からは一般貸出も始めている。

これまで利用した感想として、市民会館や生涯学習センターけやきと比較した感想が多く、他に客席の階段が急で怖い、控室が思ったより少ない、場所がわからない、控室に行きつけない、等があった。直せるところは、皆さんからアイデアをもらって直していく。

施設の違いだけでなく、借りるときの手続きの違いについても、電話で予約ができない、WEBの先行チケット販売に戸惑う等、これまで楽にできていたことができないといった、運用面の違いに戸惑う市民の方々から、厳しい意見をもらっている。

市民優待企画事業を行い、様々な意見をいただいたことはよかったと考えている。

また、建物から見る山々やお城などの風景が素晴らしく、それを見るためだけに来る人も多くいる。お弁当食べたり、スケッチしたりと、自由気ままに過ごす方も少なくない。

事務局から

- ・今年度の審議会は今回で終了。
- ・来年度の開催日程については、またご相談をさせていただく。
- ・今回会長からご提案いただいた表彰制度などを事務局で取りまとめ、今後ご審議いただくとともに、計画の評価もお願いしたいと考えている。